鳥茂渡小学校児童ら ことしも「愛の車いす」贈る

鳥茂渡小学校（菅原伊保校長、児童十二人）では、特別養護老人ホームうねとり荘（野崎貞信施設長）を昨年の十二月十三日に訪れ、アルミ缶回収活動で購入した車いす一台、ことしも寄贈しました。

贈呈式は同ホールで行われ、菅原校長は「今年も児童十二人が一生懸命アルミ缶を集め、換金したお金で車いすを持ってまいりました」とあいさつ。アルミ缶実行委員長の澤口卓弥くん（五年）が、「おじいちゃん、おばあちゃんに会うのをとても楽しみにしてきました。大事に使ってください」と笑顔で車いすを贈りました。

利用者の一人、横田ヤエさん（八五・芦渡）は、「ありがとうございます。大切に使わせていただきます」と感謝。児童たちは、よさこいソーランやトゥモローを手話で合唱し、披露しました。お年寄りたちは、目に涙をためながら拍手で喜びを表していました。

お年寄りを代表して車いすのお礼を述べる横田さん（右）

同校は、平成八年度から空き缶回収活動を展開。換金し、車いすを贈り続けて今回で七台目になります。

投稿

新巻鮭に感謝

東京都　前ふるさと普代会会長　熊谷文弥（鳥居出身・七四）

郷里普代の人たちは、年の暮れになると、都市部に住む子どもや孫、兄弟姉妹、友人知人に「新巻鮭」を送ることが慣習になっている。ありがたいことである。

この新巻鮭であるが、宮古市出身の私の友人は「田老から北のものが味が良い」と昔から言っている。

私は「変わりないでしょう」と答えているが、その友人は「私の言うことは間違いありません。いつか食べ比べてご覧なさい」という。

私も、これは普代産、これは宮古産と同時に食べたことはないから同じ味だと頑張るわけにもゆかないが、普代産がほめられているからあえて反対はしない。

友人の理屈は田老から北の鮭は川に入る前に海で捕るから水気が少なく味が良いのだという。それほど違うものかどうかわからぬが、言われてみれば何やら本当らしくも思える。

さて、新巻鮭をちょうだいする側の東京方面の台所事情であるが、ご婦人方から聞いた話しである。こちらでは大きな魚はスーパー・マーケットで切り身で購入するので家庭で魚をさばくことがなく、したがって出刃包丁の用意がない。

以前は魚屋さんに新巻鮭を持参し、金を払って切り身にしてもらったが近頃は魚はスーパーで売っているので町の魚屋さんは商売が成り立たず消滅してしまった。そのためにある若い夫婦の家では送られた新巻鮭をもてあまして捨ててしまったという。もったいないが本当の話である。

東京方面に住む子どもさんたちにでも言われたものであろうか、近頃は、姿のままの新巻鮭に二センチか三センチの幅で包丁でカットを入れ、背骨だけ調理鋏（はさみ）で切断すれば一食分の切り身になるような工夫をして送っておられる人もいる。

鮭一本の豪華さも失わず、頂戴する側も処理が楽でよいアイデアである。

「見た目」よりも「食べやすく」ということで、すべて切り身にして送っておられる人もいる。

いづれでも良いが郷里の新巻鮭は本当においしくありがたい。

が伝承している中野流鵜鳥七頭舞（うのとりなずまい）を披露＝写真＝しました。

会場となった同ホールには、生徒たちの躍動感あふれる舞を見ようと、施設利用者や職員ら約五十人が集まりました。

鮮やかな衣装に身を包んだ生徒たちは、鵜鳥神楽保存会が奏でる太鼓、笛などにあわせ、躍動感あふれる舞を約三十分にわたり熱演しました。

同好会は「うねとり荘」訪問に先立ち、久慈市の介護老人保健施設「欅（けやき）の里」でも舞いを楽しんでもらいました。

神楽同好会の副会長太田俊英くんは、本年度の活動の思い出として、八月に東京都で開催された全国中学校文化連盟総合文化発表会の出演を一番にあげ、「今日は気合を入れて舞います。来年度も頑張りたいと思います」と目を輝かせながら抱負を語ってくれました。

同好会は九月の「ふだいまつり」、村をあげて行われた十月の海の祭り「ふだいまるごと海産まつり」、十一月盛岡市の県民会館で開かれた県中学校総合文化祭などで舞い、高い評価を受けています。